

〈論文〉

『源氏物語』における道家の神仙思想について

張 楠

はじめに

中国伝統文化の中、道家文化は諸子百家の根本だと認められるので、儒学以上の大きな影響力を持っていた。道教は道家文化の一部として、老荘の説いた「道」への合一による不老長寿を目標とする宗教であり、道家の老荘哲学思想の本質を継承している。道家の流派について、胡孚琛氏は次のように言っている：

道家始於伏羲・女媧・神農，黃帝繼承之，並為老子集成，後為楊朱・詹何推進，列子・莊子推廣。陰陽家・神仙家為道家之分派，法家・兵家・縱橫家為道家變化而來。……天文・讖緯・五行・律歷・卜筮・占驗・醫藥・金丹等方技術數，皆為道家學術變化而來。道家學術因此之樣精通物事，體用兼備。¹

空間的に見ると、道家文化はあらゆるものを網羅しながら要点をしっかりと握っている。道教は煩雑で項目が多く、さまざまに分類しえるもので、道教と神仙学は、道家文化がさらに発展、変化したものである。

1. 道家の神仙思想とは何か

神仙学について、長生成仙は道教の修練の根本的な目標であり、古い神仙学は道教と密接に関わっている。実際、道教が成立して以降、神仙学は主に道教によって伝えられ、ついに神仙学は神仙道教の主要な内容になった。道教の教理と教義には常に神仙信仰が含まれていた。道教にはおよそ数百種の神がいる。古代の母系氏族社会の自然崇拜、トーテム

1 胡孚琛 [1999], pp.70-71 参照。

崇拜、女性崇拜、祖先靈魂崇拜というような原始宗教の名残があり、天を敬い、祖先を崇めた周代の礼教の延長もあり、万物有靈論から生み出されたさまざまな守護神や職能神もある。支配階級の意志によって国家の政体を模倣して設けられた善悪を監督し、命や過ちを司る管理神もあり、国家によって封じられた名のある人や民間で敬われていた賢者が久しく祭祀されてきたものもある。

言わば、中国は封建宗法専制を実行してきた農業大国であり、その神霊体系は古い天神崇拜が主軸になっている。人々は天災・人災におびえながら生活し、世の中の妖魔や悪鬼があちこちで自分の生存を脅かしていると感じ、多くの守護神を作り出さざるを得なくなったわけである。現実の社会の中では、大衆一般のみならず、朝廷の大臣、官吏や知識人でも自身の吉凶禍福を予測することは難しく、自分の頭上に災いが降りかかるかもしれないという恐怖から、ひたすら神霊に祈っていた。ついには皇帝も天神の守護を失うことを恐れて敬虔に昊天上帝を祭祀した。そして、自分の存在の土台として、これらの多くの神霊が進んで道教に溶け込む取り組みを行うようにしてきた。その本質として、次のごとき二点にまとめあげることが出来よう。

まずは道の信仰と諸尊神。「道」の信仰が道教の根本的な信仰であり、その教理と教義は「道」の信仰と天神崇拜を統一するための理論なのである。道家の早期の経典である『道德経』（『老子』）や『太平経』から、後世の道教経典に至るまで、すべて「道」を、天を生み、地を生み、万物を生み出す宇宙の本源であるとみなし、これが天神崇拜の明確な根拠になった。唐の道士呉筠は『玄綱論』で、「道者何也。虚無之系、造化之根。神明之本、天地之源。」²と書いている。また『太上老君説常清静経』は、「大道無形、生育天地。大道無情、運行日月。大道無名、長養万物」³と主張している。つまり「大いなる道に形なく、天地を生み育む。大いなる道に情なく、日月を運行する。大いなる道に名なく、万物を長じ養う」という見解である。このように、天も「道」から生まれたものであるから、自然と天神崇拜と共に「道」の信仰に帰属することになった。

早期道家の道教では太上老君を信奉していたが、東晋の時期には上清派が元始天尊を太上老君の上に置き、その後、符派の太上大道君（靈宝天尊）が出現し、次第に道教の三清尊神が形成されてきた。三清の下に四御⁴があるが、これは天地の事物を司る四大天帝である。このほかにも、道教の中には十方諸天尊、三官大帝（天・地・水）、五曜二十八宿

2 董誥 [1987], PP.12185.

3 張繼禹 [1988] 『道蔵・太上老君説常清静経』, PP.344.

4 三清を補佐する四柱の天帝：玉皇大帝、中央紫微北極大帝、勾陳上官天上帝、后土皇地祇、四輔とも呼ばれる。

など、非常に多くの日月星辰の神々が設置してある。

次は道の信仰と諸仙真。道教の神の多くは人間の想像によって作り出されたものであるが、仙は修練を積んだ人、或いは植物や動物が原型になっている。仙人は「道」を得た人なので、仙を信仰することは道を信仰することでもある。道教は生を重視し、死を嫌がるのだから、道を修めるには、「自分の命は自分にあり天にはない」という主張にしたがって、生を養うことから始めることが多い。『老君妙真経』では、

人常失道，非道失人。人常去生，非生去道。故養生者慎勿失道，為道者慎勿失生。
使道与生相守，生与道相保。⁵

と述べている。このように生を修めることは道を修めることであり、道を得ることは長生できることであり、道と一体になった人だけが長生久視の仙人になるのである。だから、生の修練は仙を追求することであり、道を信仰することでもある。

仙道を修行する人は、最初に世俗を看破し、物欲のために苦勞することなく淡泊さを心に抱くことができなければならない。そうすれば、自然無為・清静超俗の境界に到達することができる。道家や道教の祖師である老子や荘子がこの清静無為派の仙人に属する。

道教の仙真は、道を体得して仙になった人である。これらの人々は不思議な力を持っている故に、仙人の伝記に記載され、後世の修道者の手本となったわけである。道教の仙人の伝記には、劉向の『列仙伝』、葛洪の『神仙伝』や後世の『洞仙伝』、『続仙伝』、『三洞集仙録』、『歴代真仙体道通鑑』などがあるが、⁶ 女仙の伝説を記録したものとしては、『城集仙録』や『歴代真仙体道通鑑後集』がある。そのほか、道教には民間の俗神の信仰から発展した神霊もあり、道教と中国の民俗とが密接に結び付いていることを反映している。また、道教には十洲三島と呼ばれる仙界、仙境の伝説がある。そこには仙草靈芝が生え、宮閣楼台があり、仙童玉女がいて、諸々の仙真が遊んだり、憩いを行ったりしている。中国の名山大川にも、風景秀麗な洞天福地があり、道教の仙真がそこで修練している。その中には「三十六洞天」と「七十二福地」がある。多くは昔の仙人が道を得た場所であり、道士の修練に最も適した場所である。⁷

5 張繼禹 [1988] 『道蔵・太上老君妙真経』, PP.554.

6 胡孚琛 [1999], pp.198.

7 洞天福地は、道教で神仙の住むとされる名山勝境のこと。洞天は、壺中天と同じく、一つの限られた空間の中に全宇宙が存在するという考えから生まれたものようであるが、同時に、それは地下の霊界とつながりをもった聖なる場としての〈洞窟〉に対する原始的な信仰にも基づくものであろう。この考えが唐代になって整理され、玄宗の時の著名な道士・司馬承禎撰『天地宮府図』記載にはじまる。十大洞天、三十六小洞天、七十二福地の名が定められた。

2. 平安文学における道家の神仙思想

岡本健一氏は次のように、道家の神仙思想は日本の古代に大きな影響を与えたことを述べている。

神仙思想は道教の主要な柱で、その核心は「不老不死」の追求にあった。現代人の目からみれば、古今東西の錬金術と同様、荒唐無稽の夢物語にすぎないが、かつて東洋人は不老不死の仙人が棲むというユートピア「仙境＝蓬莱山・崑崙山」にあこがれ、同時に、太陽が毎朝若々しく再生してくるといふ生命の樹「扶桑樹」にあやかるうとした。「蓬莱山」も「扶桑樹」も、ともに中国古代の神仙思想が産みだした共同幻想である。海東のかなたには、亀の背に乗った「壺型の蓬莱山」が浮ぶ。海東の谷間には、太陽が昇る「巨大な扶桑樹」がそびえる。わが古代びとも「蓬莱山に棲む仙人のように長生きしたい、扶桑樹に昇る太陽のように若返りたい」とつよく願って、神仙思想をすすんで受け入れ、蓬莱山と扶桑樹にたいする憧憬をつのらせてきた。⁸

平安時代の漢詩文の中に、神仙思想の受容が多く見られる。不老不死の神仙郷や神仙を対象とする神仙思想は奈良時代以前にもう日本へ伝わり、平安時代に造園、洲兵盤等調度や文学にその跡を残した。例えば『続日本後紀』には、

戊辰。御豊楽院。終日宴楽。悠紀主基共立標。其標。悠紀則慶山之上栽梧桐。両鳳集其上。従其樹中起五色雲。雲上懸悠紀近江四字。其上有日像。日上有半月像。其山前有天老及麟像。其後有連理吳竹。主基則慶山之上栽恒春樹。樹上泛五色卿雲。雲上有霞。霞中掛主基備中四字。且其山上有西王母献益地図。及偷王母仙桃童子。鸞鳳騏驎等像。其下鶴立矣。於是悠紀標忽被風吹折。工人扶持。乃興復之。⁹

とあるから、西王母中心の神仙説が知られていたことは間違いない。そのほか、山本紀綱氏の考証より、「浦島太郎伝説」、『竹取物語』、『梁塵秘抄』、『源氏物語』、『今昔物語』、『宇津保物語』、『古今著聞集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『中右記部類紙背漢詩集』、『本朝無題詩』、『鳩嶺集』、『和漢兼作集』、『性靈集』、『江吏部集』、『本朝統文粹』、『本朝文集』、等の各作

8 岡本健一 [2008], PP.3。

9 『続日本後紀』巻二、天長一〇年（八三三年）十一月戊辰（十六日）の条。

品の中では、全て「蓬莱」など仙界が取りあげられている。¹⁰「蓬莱」などの神仙境について、最も有名な記載は『史記』にある。『史記』「封禅書」には、

自威，宣，燕昭使人入海求蓬莱，方丈，瀛洲。此三神山者，其傳在渤海中。去人不遠。患且至，則船風引而去。蓋嘗有至者，諸仙人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白，而黃金銀爲宮闕。未至，望之如雲。及到，三神山反居水下。臨之，風輒引去，終莫能至雲。¹¹

と記載している。ほぼ同様の内容が『史記』「秦始皇本紀」にもある。

既已，齊人徐市等上書，言海中有三神山，名曰蓬莱，方丈，瀛洲，僊人居之。請得齋戒，與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人，入海求僊人。¹²

また、平安朝の漢文の名編を集めた『本朝文粹』には、「神仙対策」，「白簪翁詩序」など明らかに神仙思想の影響が見られる作品もある。『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』には、類題として「仙家」が設けられ、このテーマに即して作られた中国、日本の詩を集めている。例をとって原文を挙げておく。

江都之好勁捷也。七尺屏風其徒高。淮南之求神仙也。一旦乘雲而何益。¹³

と言うように、「淮南」，「神仙」など道教の言葉が明らかに言われている。また、『和漢朗詠集』目次の「鶴」には、都良香の「神仙策」と言う詩がある。

鶴帰旧里。丁令威之詞可聽。龍迎新儀。陶安公之駕在眼。¹⁴

都良香は菅原道真の師とされ、『本朝神仙伝』にその伝が収められている都良香は、道家文化思想に深い理解を示し、神仙にまつわる説話が複数伝えられている。例えば菅原道真

10 山本紀綱 [2008]，PP.45。

11 司馬遷 [2008]，PP.1369。

12 司馬遷 [2008]，PP.247。

13 『和漢朗詠集』 卷下目次の「親王（附王孫）」，源順の「親王入学詩序」の詩より。川口久雄 [1965]，PP.222。

14 川口久雄 [1965]，PP.163。

に昇進で先を越されたことから、良香は怒って官職を辞し、大峯山に入って消息を絶った。百年ほど後、ある人が山にある洞窟で良香に会ったところ、容貌は昔のままで、まるで壮年のようであったという説話がある。

さらに代表的な作品は日本最初の神仙説話集、大江匡房の『本朝神仙伝』である。大江匡房は日本における神仙思想史受容上、特筆大書される存在である。その著書『本朝神仙伝』は平安時代唯一の神仙列伝であり、これについては註釈や研究がある程度進んでいる。中国では、『列仙伝』や『神仙伝』がともに成立していたが、『本朝神仙伝』はそれらを十分に意識したうえで、中国の『神仙伝』や『列仙伝』に倣って、「本朝」の「神仙」として編纂されたものと考えられる。そしてその中には、聖徳太子、空海などの著名人物から、浦島子や無名の人々までが「本朝」の「神仙」として取りあげられている。『本朝神仙伝』に記された日本の仙人三十七人、『列仙伝』に記された中国の仙人七十二人を紹介し、日本と中国の独自の仙人像を明らかにする。大江匡房は、『忙校不如閑詩序』（『本朝続文粹』巻八）のように他にも膨大な著作を遺しており、その中に神仙思想の受容も見られる。

以上見てきたように、道家文化に由来する神仙思想は早くから日本に入り、『日本書紀』、『懐風藻』、『万葉集』など、奈良時代成立の作品にもその反映が見られる。平安時代以降は、都良香、紀長谷雄、三善清行など文人によって、神仙思想に彩られた漢文伝が相継いで書かれて、その受容の様相、また日本における独自性を明らかに分かる。『源氏物語』は平安文学を代表する作品として、神仙思想を踏まえたことは決して不思議なことではないと考えられる。

3. 『源氏物語』における神仙信仰の受容

道家の神仙思想が文学創作には豊かな素材を与えている。古今・和漢を問わず、深い知識を持っている紫式部は、虚構の物語である『源氏物語』によって、「もののあはれ」の美意識に基づき、苦悩に満ちた俗世から不老長寿を求め得る仙道の世界へと飛翔し、その世界で逍遙すべきだという神仙思想の受容が明らかに見られる。

3.1 仙人と仙女

『源氏物語』には、「仙人」の語は、尼君が妊娠中の明石の姫君に入道のことを語った場面の「今は仙人の世にも住まぬやうにてゐたなる」一例のみである。¹⁵「仙女」に関しては、

15 紫式部[1983] 巻四「若菜・上」、PP.98。

「紅葉賀」巻と「葵」巻に見える。「紅葉賀」巻の最後で、藤壺が中宮に立ったようである。源氏が藤壺に憧れて歌を詠んだ場面に、

七月にぞ后るたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。(中略)まして、わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すすろはしきまでなむ。「尽きもせぬ心の闇に暮るるかな、雲居に人を見るにつけても」とのみ、独りごたれつつ、ものいとあはれなり。¹⁶

と述べている。また「葵」巻で、葵上死後の時雨の日に、源氏は葵上を追慕する場面に、

君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」(中略)中将も、いとあはれなるまみに眺めたまへり。「雨となりしぐるる空の浮雲を、いづれの方とわきて眺めむ行方なしや」と、独り言のやうなるを、「見し人の雨となりにし雲居さへ、いとど時雨にかき暮らすころ」とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしるく見ゆれば。¹⁷

と描かれている。この二つの場面とも楚の襄王が夢で神女と逢い、即ち「巫山の神女」という故事を踏まえ、女との契りの儂さ、女の魂の在りところの不確かさ、残された男の惜しみ惑う様を表現する。宋玉「高唐賦・序」に、

昔者先王嘗游高唐。怠而昼寝。夢見一婦人。日、「妾巫山之女也。為高唐之客。聞君游高唐。願薦枕席。」王因幸之。去而辞日、「妾在巫山之陽高丘之岨。旦為朝雲。暮為行雨。朝々暮々陽台之下。旦朝視之如言。」¹⁸

と言う話がある。この幻の恋物語は華やかさを連想させる。紫式部はこれを踏まえて、源氏が藤壺や葵上に恋しく思うのを描き出しながら、読者たちの脳裏には、夢のような情景を思い描いたかも知れない。

16 紫式部 [1983] 卷四「若菜・上」, PP.419-420。

17 紫式部 [1983] 卷四「若菜・上」, PP.48-49。

18 蕭 統 [1977], PP.193。

3.2 月の都

「須磨」巻で、政争に敗れた光源氏が都を離れ、僻地の須磨へ流れてくる。おりしも須磨の上空には中秋の名月が掛かっており、それを見た光源氏が、

見るほどにしばしと慰むめぐり合はん月の都ははるかなれども¹⁹

と、華やかな都での生活やそこに残してきた人々のことを懐かしんだ。「月の都」はこのような帝都の美しさを讃える言葉で、「手習」巻にある歌の中にも登場する。

我かくて憂き世の中にめぐるとも、誰れかは知らむ月の都に²⁰

と、小野山荘で暮らした浮舟は月の明るい夜に、つくづく物思いをして、こんな歌を詠まれた。

中国の伝説によれば、月の中には巨大な桂の樹があり、呉剛なる西河の人がそれを伐り倒そうとする姿が月面に見えるという。ここから転じて「月桂」の故事は、眼に見えながらも、手に取ることのできない想いの譬えとなった。従って、中国では月中に仙女の棲む広寒宮という宮殿があるとされ、唐の玄宗は中秋の夜に、この広寒宮で遊んだという故事もある。²¹

『万葉集』巻四・六三二番には湯原王の作った、

目には見て手には取らえぬ月の内の楓のごとき妹をいかにせむ

という歌が収められている。湯原王は天智天皇の孫で、光仁天皇の兄弟に当たるから、どうやらこの中国の伝説は、八世紀前半には日本に伝えられていたらしい。

また神仙思想が強く影響された『竹取物語』の末尾になると、かぐや姫は月を見あげて物思いにふけったり、泣き出したりするようになる。周りの者が問いただすと、

おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。²²

19 紫式部 [1983] 巻二「須磨」, PP.194。

20 紫式部 [1983] 巻六「手習」, PP.312。

21 唐・柳宗元著した『龍城録』や唐の史書『開元遺事』にも見える。

22 [1972]『竹取物語』, PP.135。

と答え、つまり自分は「月の都」の住民であったのが、わけがあって地球で暮らしてきた。しかし今度の中秋の名月の夜には、月の都の者たちが迎えに来るので、故郷に帰らなければならぬと答える。その後、月の都からの迎えが到着すると、迎え撃つ準備をしていた帝の兵士たちが齒も立たず、かぐや姫は羽衣を着て月へと帰還してしまうのは周知の故事である。ここには、上述した広寒宮のような神仙思想が感じられる。

ところで、月を見ながら泣くというかぐや姫の所作は、須磨の光源氏が中秋の名月を見ながら、都での華やかな生活やそこに残してきた人々を懐かしがって泣いたこと、また小野山荘に閉じこもっていた浮舟が月の明るい夜に、母親と乳母を思い出したこと、とよく似ているのではあるまいか。即ち、三人は同時に「月の都」という語を口にしていて、いずれ別の場所で触れることになると思われる。「須磨」や「手習」を執筆した紫式部の脳裏には、「月の都」へ帰る直前のかぐや姫のイメージがあったかもしれない。このように、こうした月にあるという夢のような都への憧れと、「眼に見えども、手が届かない」月桂の故事との観念連鎖は、『万葉集』から『源氏物語』に至るまで、月が遠い場所に残してきた都への憧れを託す鏡となっていたように思われる。

3.3 反魂と反魂香

離魂のうち、少なくとも死後の招魂(反魂)は道教の影響例と言えよう。『長恨歌』に拠ると、玄宗が道士に楊貴妃の魂を訪ねに行かせ、蓬莱宮で「仙子」となった彼女と出会う。これが、『源氏物語』にもめっきりとした影響をもたらしている。例えば、更衣の母からの贈物を見ての帝詠、

たづねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく²³

また、紫上死後の源氏詠、

大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行方たづねよ²⁴

といった、物語の根幹を成す男女関係において『長恨歌』がそのまま、引かれている。そのほか、「宿木」巻で、薫君は中君に異母妹の浮舟のことを聞かせてもらい、後者と話し

23 紫式部 [1983] 巻一「桐壺」、PP.111。

24 紫式部 [1983] 巻四「幻」、PP.531。

あう場面において、

「世を海中にも、魂のありか尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めむ方なきよりはと、思ひ寄りはべる人形の願ひばかりには、などかは、山里の本尊にも思ひはべらざらむ。なほ、確かにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。²⁵

と述べている。また、薫君は大君と似ている浮舟を垣間見る場面においても、次のごとく、そのモノローグを語っている、

「ただ今も、はひ寄りて、世の中におはしけるものを」と言ひ慰めまほし。蓬莱まで尋ねて、釵の限りを伝へて見たまひけむ帝は、なほ、いぶせかりけむ。「これは異人なれど、慰め所ありぬべきさまなり」とおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。²⁶

中でも、「世を海中にも、魂のありか尋ね」とも、「蓬莱まで尋ねて、釵の限りを伝へて見たまひけむ」とも、『長恨歌』を踏まえたことである。いわば、『長恨歌』は道教色の濃い物語的な詩であり、道教の神仙説や方術学は『長恨歌』において、かなり大きく取り扱われている。「臨邛の道士」が勅命を受け、楊貴妃の魂を見つけた地・蓬莱は古代中国では東の海上にある仙人が住んでいると言われた山であり、道教の代表的神仙境とされているわけである。

さらに、「総角」巻に、宇治の大君と中君が故八宮を思い出して話し合う場面で、下記の一文が引かれている。

「このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ。いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ。罪深げなる身どもにて」と、後の世をさへ思ひやりたまふ。人の国にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。²⁷

「人の国にありけむ香の煙」について、『河海抄』『総角』では、「九華帳深夜愴々、反魂香

25 紫式部 [1983] 卷五「宿木」、PP.439。

26 紫式部 [1983] 卷五「宿木」、PP.481。

27 紫式部 [1983] 卷五「総角」、PP.302。

反夫人魂」²⁸ という『白氏文集』の一節を引いて、

李夫人うせての後漢武帝甘泉殿の裏に、彼、貌を図して方士をして、靈薬を合せしめて金器に焚しかは香の煙の中に、夫人の姿みえし事や²⁹

と解説している。『国語辞典』に、反魂香について、下記のように解釈している。

反魂香とは、焚けば死人の魂を呼び返してその姿を煙の中に現すことができるという想像上の香。武帝の依頼により方術士が精製した香で、西海聚窟州にある楓に似た香木反魂樹の木の根を煮た汁を漆のように練り固めたものという。³⁰

この解釈は、道教の経典である漢・東方朔著した『海内十洲記・聚窟州』にも見られる。

反魂香或名之為震檀香,或名之為人鳥精,[中略] 一種六名,斯靈物也。香氣聞數百里,死者在地聞香氣乃却活,不復亡也。以香熏死人,更加神驗。³¹

また、漢の武帝が李夫人の死後、香を焚いて、その面影を見たということについて、『漢書』「外戚伝」に、

及夫人卒,上以后禮葬焉。[中略] 上思念李夫人不已,方士齊人少翁言能致其神。乃夜張燈燭,設帷帳,陳酒肉,而令上居他帳,遙望見好女如李夫人之貌,還幄坐而步。又不得就視,上愈益相思悲感,為作詩曰,「是邪,非邪? 立而望之,偏何姍姍其來遲。」令樂府諸音家弦歌之。上又自為作賦,以傷悼夫人。³²

と記載している。『漢書』には、李夫人の墓は武帝の陵の西北にあり、英陵と呼ばれ、集仙台(神仙を集まる台)とも呼ばれる記載もある。³³ 即ち白楽天の『李夫人』の詩には、『漢

28 顧学頤 [1979], PP.82。

29 玉上琢弥 [1978], PP.62。

30 松村明 [1998], PP.433。

31 張繼禹 [1988], 『道藏・海内十洲記』 PP.52。

32 班固 [1962], PP.3952。

33 班固 [1962], PP.1142。

書』によって「反魂香」のような神仙信仰を加えてある。『源氏物語』に、これらの反魂についての描写は、叶うことの無い願望であり、魂の元を訪ねたり、魂が戻ってくるような神秘的、超自然的なことは描かれず、志怪や伝奇とは一線を画しえたと思われる。

3.4 松にかかれる藤

「蓬生」の巻、須磨、明石の三年間の流離の旅を経て帰京した光源氏が、その翌年の卯月の夜に花散里を訪れる道で、はしなくも末摘花の邸を見いだす場面である。

大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。³⁴

むろん、松にかかれる藤という景は決して珍しいものではないが、片桐洋一氏は、

「松にかかれる藤浪」が平安時代の和絵屏風の絵柄としてあり、それがさらに唐絵の構図にも遡りうること。そして松柏にかかる蔓草は中国の神仙的世界の象徴でもあって、「松にかかれる藤浪」が中国の神仙思想に基づく類型的構図である。³⁵

と説いた。それは中国の詩句に「松と藤」の表現が多い。例えば、北周・庾信の「婉婉藤倒垂，亭亭松直豎（「遊仙」）は、高く聳える松から垂れ下がる藤の枝を仙界の景として描くものである。また、唐・王維の「水穿盤石透，藤繫古松生」（「春過賀遂員外藥園」）は、仙界に準ずる薬園においても、良薬と言われた藤の花は古松に繋がっていたのを詠むものである。さらに唐・李白の「紫藤掛云木，花蔓宜陽春」（「紫藤樹」）は、高い木から垂れてきた紫色の藤の美しさが詠われた。

中国文学においては、神仙的世界に過ぎた久しい歳月が古松にまとわる古藤によって視覚化されていたのであった。また、「藤」の持つ「葛藟」³⁶から連なる仙界へよじ登る物というイメージ、更に「神おろし」の効用、そして「藤」が齊梁以降の仙味を帯びた作品の中ではかなりポピュラーな植物だったこと等³⁷を考え合わせると、「松にかかれる藤浪」

34 紫式部 [1983] 卷五「藤裏業」, PP.98。

35 大谷雅夫 [2010], PP.44。

36 『廣雅』では、「藟，藤也」と言い、「藤」を「藟」と同じものにして。「藟」はつる草の総称やつるを指していて、『詩経』ではよく「葛」と並べて詠まれる。

37 矢嶋美都子 [1980], PP.109-132。

に神仙境（異郷）のイメージを賦与した。末摘花の故常陸宮邸は、いつとも知れぬ光源氏の訪れを待ち続け、俗世間からの辱めを受けない神仙の世界であった。源氏を待ちつつそこに流れた久しい時間が、その松と藤によって表現されたのである。

ちなみに、『源氏物語』における「松と藤」の取り合わせは、「藤裏葉」の巻にも見える。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだほのかなる梢どものさうごうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。³⁸

これは四月の夕暮れ、夕霧が内大臣邸の藤花の宴に招かれた場面である。藤蔓をたよりに客が訪れるこの地では、松の木の影が池の水面に映り、松が風に運ばれてくると詠う。この描写には、漢詩文の雰囲気が濃厚である。唐の時代から、藤は山中の雑草から身近に鑑賞する価値のある花になった。もちろん庭に植えた藤だけではなく、自然の藤の花も鑑賞されるようになり、水辺で垂れている藤や松にかかる藤が多く詠まれるようになった。例えば、初唐の上官昭容の「攀藤招逸客，偃桂協幽情。水中看樹影，風裏聽松声」（「遊長寧公主流杯池二十五首」）は、長寧公主の御苑を神仙界に擬えた。そのように漢風の表現を引き寄せて、詩に詠われた庭園のさまが、内大臣の庭にも写されているように思われる。内大臣邸の庭は、神仙の世界に擬えすべき場所であることが明示されていたのである。

おわりに

道家の神仙思想は古くから中国と日本文学の中で重要な役割を果たしてきた。『源氏物語』には、源氏が藤壺や葵上に恋しく思うこと、浮舟や源氏は月の明るい夜に物思いをすること、「反魂と反魂香」、「松にかかれる藤」及び「蓬莱」などの表現から見ると、主要人物や場所に神仙の雰囲気を漂わせて、道家の影響が明確に汲み取られることがよく分かる。

追記：本論文は、中国教育部人文社会科学基金青年研究項目（項目番号：15YJC752043）の中期成果である。

38 紫式部 [1983] 卷五「藤裏葉」, PP.375。

参考文献

- 単行本 日本文献 岡本健一 [2008]『蓬萊山と扶桑樹』思文閣出版。
 松村明 [1998]『国語辞典』旺文社。
 玉上琢弥 [1978]『紫明抄・河海抄』角川書店。
 川口久雄 [1965]『日本古典文学大系・和漢朗詠集』岩波書店。
 森田悌 [2010]『続日本後紀』講談社学術文庫。
 紫式部 [1983]『日本古典文学全集・源氏物語』小学館。
 [1972]『日本古典文学全集・竹取物語』小学館。
 山本紀綱 [1975]『徐福東来伝説考』謙光社。
- 外国語文献 胡孚琛 [1999]『道学通論——道家・道教・仙学』中国社会科学文献出版社。
 張繼禹 [1988]『道蔵・太上老君説常清静経』文物出版社。
 張繼禹 [1988]『道蔵・太上老君妙真経』文物出版社。
 張繼禹 [1988]『道蔵・海内十洲記』文物出版社。
 司馬遷 [1964]『史記』中華書局。
 顧学頴 [1979]『白居易集』中華書局。
 班 固 [1962]『漢書』中華書局。
 董 誥 [1987]『全唐文・玄綱論』中華書局。
 蕭 統 [1977]『文選』中華書局。
- 単行本所収論文 大谷雅夫 [2010]「源氏物語と漢文学」仁平道明編『源氏物語と東アジア』新典社。
 雑誌論文 矢嶋美都子 [1980]「庾信の「遊仙詩」に表れた藤について：葛藟から紫藤へ」
 『亜細亜大学教養部紀要』N21, PP.109-132。